

世界 駆け ある 記 (その 2)

加 藤 正 夫



写真 1 イギリス, ウィンザー城の前景

この頃イングランドはすでに9月の雨季に入っており、毎日降ったり止んだり陽ざしを見ることが少ない毎日であった。

実はイギリスから先の旅行計画に対してはまだこれを決めかねていたのである。つまりアメリカに渡るにも Visa が直ぐに取れるかどうかわからなかったからである。翌日早速日本大使館に行きアメリカとカナダの Visa を取ることを依頼した。とにかく数日様子を見なければ飛行機の予約もできないし、またイギリスでの旅程もこれから立てなければならぬので、2日間を手紙を書いたり電話をかけたりしてスケジュールを作ることやその他の事務に費した。

9月14日朝 Aluminium Development Association に West 博士を訪問した。日本の軽金属協会会長安田氏の紹介状をもらっていたのである。イギリスのアルミニウム事情を伺い、そのあと Elliot 氏と、主として耐食性アルミニウム合金についてディスカッションしてもらった。イギリスでも耐食性アルミニウム合金の BS 規格を改訂中で、その改訂の方向がドイツのそれと近いものであることもわかった。ヒドロナリウム合金のディスカッションのうちで私の納得できない説明があったが、あとで訂正の手紙をくれるなどの誠意をうれしく感じた。午後日本大使館に行くとアメリカとカナダの Visa が取れていた。こんなに早く手続きが完了することは珍しいことだそうである。やはり私の Passport が Diplomatic であったということがよかったらしい。そこで早速 Pan American の 19 日の席を予約した。

翌 15 日は British Nonferrous Metals Research

Association を訪問した。ドイツの学会で親しくなった Himmel 博士の紹介状をもってこの研究所の Director である Bailey 博士にお目にかかった。同博士は 20 日から Buxton で開催されるイギリス金属学会の秋期大会に出席することを勧めてくれたが、丁度飛行機を予約したばかりではあるし、適当な変更ができなければ困るので一日考慮させてもらうことにした。Bentley 氏の案内で同研究所を見学した。手狭な場所で非鉄合金に関する種々の研究が活潑になされていた。ことに銅合金とアル

ミニウム合金の研究はこの伝統的研究であって、参考になることが多かった。Bentley 氏は丁度私共がやっている鑄造用 Al-Mg 合金の研究をやっている、このディスカッションは大変愉快であった。持って行った私の論文に非常



写真 2 ロンドン、ピカデリー・サーカスに立てるアルミニウム製エロス像。1893年に作られたものであるが腐食はほとんどない。

に興味をもってくれた。この研究所は業界からの寄付金と政府の交付金とによって賄われている。ドイツの Max Planck 研究所と近い性格である。見学を終って早速 Pan American の事務所に行き予約変更の手続きを行い、やっと 25 日の席を取ることができた。そこで翌日再びこの B. N. F. 研究所を訪れ Bailey 博士と Bentley 氏の親切な助力で金属学会に Gest として出席することが決まった。その日の午後は London 大学を訪問した。

翌 18 日は西原参事官夫人とお嬢さんの案内で Cambridge へドライブした。福田武雄教授から Kings College の工学部長 Baker 博士に紹介状を頂いていたのでお尋ねしたが、まだ夏休みであって同教授も不在であった。Queens College その他を見学したが、美しい公園のような環境であった。また翌日の日曜日は奥村書記官の案内で Windsor 城の見物に出かけたのである。その規模の壮麗さに驚いた。Eton College が城の近くであり、1449 年の創立といわれるこの古い大学も見学する

機会を得た。

さて 19 日は早朝 St. Pancras 駅を発って Buxton にやってきた。London の北方汽車で約 4 時間余り Sheffield に近い避暑地である。ここの Palace Hotel が会場に当てられていた。学会の事務局長 Guillan 氏は何かと親切に世話してくれた。当日午後は銅合金とアルミニウム合金の二つの部会が同時に行われ、私は後者の部会に出席した。夜は Sheffield 市長招待のパーティが催され、勧められて私も出席した。途端に新聞記者のインタビューや会長の Cook 博士と一緒に写真を撮られたり、一寸あわてて



写真 3 バクストン、会長 Maurice Cook 博士との挨拶 (シェフィールド・D・テレグラフ紙に掲載された写真)

しまったが、ドイツの学会で Himmel 博士に紹介していただいた数名の方々に会うことができ、皆さんの親切な配慮で談笑や踊や酒で楽しく過ごすことができた。翌日の午前 Sheffield 大学工学部の講堂で Sykes 博士の“金属の研究技術の進歩と改良”という講義を聞いた。同博士は現今イギリスにおける金属物理学の第一人者である。ここに話の内容の Item だけを挙げてみると、(1) 電子顕微鏡、(2) 真空溶解、(3) 光電比色計、(4) カントメーター、(5) 放射性同位元素による拡散・平衡・その他の化学的研究、(6) 偏光顕微鏡、(7) ラジオオートグラフィ、(8) 中性子廻折、(9) ゾーンメルティング、(10) 温度計、(11) γ 線ラジオグラフィ、(12) 歪計、(13) 超音波探傷器、(14) クリーブ試験器、などについて述べられた。午後は British Iron & Steel Inst. を見学した。前述の B. N. F. と同じ性格をもった鉄鋼研究所であり規模の大きなものであった。この日の夜は Cook 会長が Palace Hotel の私室に私を招待してくれ事務局長の Guillan 氏や理事の Hamer 博士 (アルミニウム研究所長) とくつろいだ歓談に一夜を過ごした。

翌 21 日は一日中 Hadfields 会社を見学した。大きな製鋼会社である。22 日は午前中金属の加工性と金属の放射線損傷の二つの部会が行われ、私は後者の部会に出席した。Harwell 原子力研究所の Finniston 冶金部長以下 4 名の研究者の話があった。翌日 Harwell を訪問する予定であったので、また Finniston 博士とは Geneva で近付きになっていたことではあるし、ここで連絡をとることができ好都合であった。午後の見学はやめ

て London に戻った。

23 日は London の西北方汽車で約 1 時間半の Harwell 研究所を再び訪問した。一日中見学に過ぎたが、Putman 氏等に望まれて私の北海道でやった漂砂の追跡実験を説明してあげたのである。その後イギリスでも漂砂の実験が始められ、互に情報を交換し合って今日に至っている。

24 日の午前は渡米の旅行準備に費し、午後からそれまで暇がなくて行けなかったロンドン塔見物に出かけ、それからテームス河を遊覧船でウエストミンスター橋まで廻り、ウエストミンスター寺院を参観した。

25 日は朝の便でロンドン空港を飛立ち大西洋を横断して夜 10 時頃 New York の空港に到着した。空港にはジュネーブ会議で国連の科学セクレタリーとして活躍した原礼之助君が車をもって出迎えてくれた。翌日は北原書記官の案内で国連事務局を見学し、それから電話で方々の appointment を取りスケジュールを作ることに費した。カナダの Montreal でも Washington でも直ぐに呼び出せるので大変便利である。この日の夜、好都合にもカーネギー・ホールでベル・シンフォニーのオーケストラとリリー・ボンスの歌を聞く機会を得たのである。

27 日朝急行で Boston に行き、M. I. T. を訪れた。はじめに Chipman 博士や Cohen 博士のいる冶金研究室を見学し、次いで Goodman 博士の案内で原子物理関係の研究室・施設を見学した。さらに Nuclear Metals Corporation にも行き、Director の Kaufman 博士に会い原子炉用金属材料の研究の現状を説明してもらった。同博士はやはり Geneva で知り合った一人である。Goodman 先生のお宅で夫人の心尽しの夕食をいただき、New York に戻ったのはもう 12 時半頃であった。

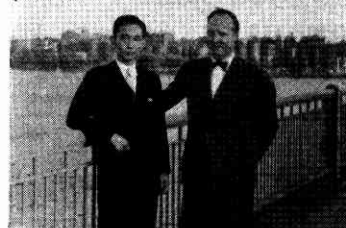


写真 4 ボストン、M. I. T. の Goodman 博士と著者

28 日は Long Island の先端にある Brookhaven 原子力研究所に Dienes 博士を尋ね、この研究所を終日くわしく見学させてもらった。物理・冶金・化学・放射線医学の各部分が緊密に協力してやっている。ここの原子炉はウラン-黒鉛、空気冷却で 28MW、Harwell の BEPO に比べると出力が 7 倍、核心部の大きさが 5 倍である。温度も 450°C まで上げられるから材料試験には都合がよい。ここでは熔融蒼鉛を冷却剤・溶媒とした新しい型の原子炉の研究を各部分が協力して進めている。この型の

原子炉は冶金的問題が重要な因子であって、冶金部の Teitel 博士らが精力的な努力を払っていた。同博士からいろいろ参考になる話を伺い、また親切にも Upton 駅まで車で送っていただいた次第である。

29日は午前中種々の事務的用事を足し、午後は原君と New Jersey にドライブし夕食はすき焼を食べたが、ここで生産性本部の関係の方と会い、一行の泊っているホテルにつれて行かれ、ここで井上春成先生としばらくお話しする機会を得た。それから夜行でカナダに向った。

カナダでは Aluminium Company of Canada 関係の加工工場・電解場・研究所等3ヶ所を Montreal・Kingston・Beauhanau と歩いた。Kingston の研究所では日本軽金属会社の副社長 Ziedemann 氏と会い Montreal まで一諸に帰る機会も得た。カナダの原子力研究所 Chalk River にも行きたかったが、どうしても時間がなく 10月2日に New York に戻った。この頃カナダはすでに秋の季候であり、野山は誠に美しく紅葉していた。

10月4日にはかねて約束してあった Hausner 博士を、Sylvania Electric Products, Inc. の原子力研究所に訪れた。ここは Long Island の Bayside という New York の Queens 地区にある景色のよい海岸にある。この電器会社は Swimming Pool 型原子炉のメーカーとして有名であるが、同時に原子炉用金属材料・ウラニウム燃料エレメントの加工などの研究もよくやっている。私のような金属屋には大変参考になることが多かった。

種々の理由で Pittsburg に行くことを取り止め、真直ぐ Washington に行くことにした。翌日は午前中 New York 出発の準備をしてから、Nikon U. S. の副社長浜島氏の招待で末広という日本料理店で日本料理をご馳走になり、それから出発までのわずかな時間を利用して“自由の女神”を見物に出かけた。夜8時の飛行機で Now York の空港を飛立った。空から見た Manhattan の夜景は実に偉観そのものであった。

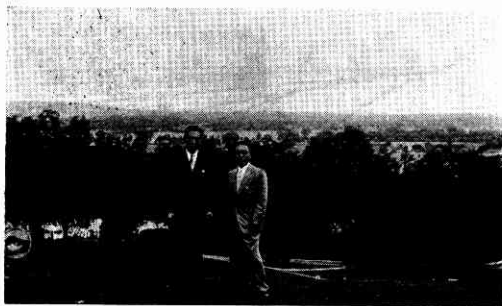


写真5 ワシントン、全市を見渡せる墓地の高台、向坊氏と著者

翌朝は日本大使館の科学アタッシュをしている向坊氏を訪れた。彼は今回のジュネーブ会議の準備にも参加され、日本からの提出書類は全部眼を通すなどしてわれわれの任務遂行を間接的に補佐してくれたのである。した

がって会議の経過には深い関心をもっていて、また丁度濃縮ウラン受入交渉の折衝中であって、私の説明を熱心に聞いてくれた。昼食後、彼の車で Washington の街をいろいろ案内してもらい、彼と別れて国立美術館のすばらしい絵画のコレクションを見学した。次の7日朝 National Bureau of Standards の研究所を訪れ、冶金部と放射線部とを見学した。前者では金属の腐蝕、軽合金、チタンなど研究が主なものであった。Logan 博士とアルミ合金の応力腐蝕の問題でディスカッションしてもらった。後者では部長の Mann 博士の案内で放射能の絶対測定、標準試料の調製を見学した。これらの仕事は数年来、アメリカ・イギリス・カナダ三国間で協同して行われている。午後3時辞去して Government Printing Office に回り、ここで発行されている文献調査の用事を足した。

私のアメリカ旅行は大いに欲張って歩く計画であったが、もう帰国を急がなければならず、かたがた手持外貨も心細くなってきたので、Oak Ridge や Argonne などの見学を断念し、8日朝一路 Washington から Los Angeles に飛んだ。アメリカ人の親友が心からよるこんで私を迎えてくれた。ここでは North American Aviation, Inc. Downey 研究所の Water Boiler 型原子炉を見学することができた。先般日本原子力研究所が同型の原子炉を発注した会社である。Howe, Pearlman, Loftness 氏らに親切に案内してもらった。ここを見学できたのは向坊氏のご尽力と私がジュネーブで Howe 博士にお目にかかっていたことによる。また私が Los Angeles 滞在中丁度 S. A. E. 主催の航空機部品展示会が開かれており、折よくその見学もできた。また日曜日を利用して友人と Hollywood と Long Beach にドライブしたことも楽しい思い出の一つである。

10月12日に Los Angeles を発って途中ハワイで stop over し、ワイキキの浜辺で2日間静養した。約2月半



写真6 ハワイ、ワイキキの浜辺

にわたる強行軍で心身ともに疲労していたのである。しかし顧みてジュネーブ会議における大任を果し得たこと、諸外国の多くの人々から多くの好意を受けたことが何よりうれしいことであった。(1956. 5. 6)